CAMK 10th

熊本市現代美術館 アート・キッスレター ｜無料｜FREE

ART KISS LETTER

vol.58
2012盛夏

作品解説をする篠山紀信さん

巻頭言

時代のアイコン ― 篠山紀信

「写真」が芸術に近づくのは、「絵画」ではなく「演劇」を通してである、とロラン・バルトは言う。写真を発明したイギリスのタルボットとフランスのダゲールは、二人とも画家であったが、よりダイナミックな影響力をもったダゲールは、舞台美術家であり、パリの幻想的なパノラマ館の支配人でもあった。つまり写真の起源に演劇的要素を認めることができ、DNAとして今も擦りこめられていると言えよう。

私が接した何人かのイギリスの演出家が行っていたことだが、役者に対して、芝居の最初のセリフが発せられる時、戯曲には書かれていないそれ以前に起こったであろう事を徹底的に想像させる。それによって最初の言葉が緊張を孕んだものとなり、密度の高い劇的空間が生みだされる。篠山紀信の写真を見ていると、写真は、実は演劇と深く結び付いているのではないか、と実感させられるのだ。時代の凝縮された瞬間を捉えてきた篠山は、真の意味ですぐれた演出家ということができる。

今回、篠山のきわだって壮麗な肖像写真展が実現したが、その迫力は、破格の展示規模だけでなく、1点1点のもつ深く充実した時間の重さからくる。彼は被写体を前にして、「何かが降りてくる瞬間」にシャッターを切ると言う。これは正に荘厳の一瞬であり、アルフレッド・スティーグリッツが雪の路上で待ち続け、歴史的名作《終着駅、ニューヨーク》を撮った瞬間を連想させる。そこでは撮られる前の長い時間と、凝縮した一瞬があり、そして過ぎ去っていく時間がある。そして最終的に、演劇であれば何もない空間が、音楽であれば沈黙が訪れ、しかし写真は、かつてあった瞬間が目の前に存在するという凄さがある。

「篠山紀信展　写真力」は、写真が単に時代を切り取ったものでなく、一瞬を停止したものでもなく、過去と現在と未来を繋ぐ、正に篠山写真が内包する激烈な力を示すものとなった。

熊本市現代美術館館長　桜井武

篠山紀信展　写真力
2012年6月30日〔土〕― 9月17日〔月・祝〕

http://www.camk.or.jp

Contemporary Art Museum, Kumamoto

CAMK（キャンク）とは熊本市現代美術館の愛称です。

MUSEUM INFORMATION

2012 APR-JUN

ミュージック・ウェーブ

展覧会や季節にあわせたコンサートを開催しています

No.057 ゴルーデンバーグ・デュオ

2012.4.21

今回のミュージック・ウェーブでは、アメリカより来日したウィリアム・ゴールデンバーグ（ピアノ）氏とスーザン・ゴールデンバーグ（ヴァオリン）氏をお迎えして、兄妹デュオコンサートを開催しました。バロック音楽のヘンデルや中国の現代音楽家ユアン・マオ、そして日本の名曲「宵待草」「荒城の月」など東西の音楽を抒情性豊かに奏でてくれました。アンコールでは、来場者の皆さんの歌声とともに、「ふるさと」を演奏してくださいました。音楽は国境を越えて、私たちの心をつなぐものだと改めて感じさせる素晴らしいコンサートとなりました。（A・A）

【参加人数70人】

詩の朗読会

くまもと詩の朗読の会共催の自作の詩の朗読会です

テーマ「ほほえみ」

2012.4.26

第101回の詩の朗読会が開催されました。13人の方が詩作を発表・朗読しました。何人かの方が、「今回は難しくて…」と前置きされながら発表されていましたが、「ほほえむ」という行為を、それぞれ発表者の身と経験に照らしながら、その様々な表情を浮かびあがらせていました。

荒れる世間の一方でネコと家族と自分の夕飯のなかにあるほほえみ、闘病生活で想うほほえみまでの心の距離、入院と退院を経験するなかでのほほえみなど、日常に即したものから、無意味ににっこり笑ってその場をやりすごす、そのほほえみが何であるかについての考察、幸せそうなほほえみの裏にあったかもしれない不穏などが詩作に表現されました。小泉八雲などが驚きをもって言及した、ひどく不幸な時にもほほえむ日本人、という描写を思い出しながら耳を傾けました。（H・T）

テーマ「絵本」

2012.5.24

第102回詩の朗読会が開催されました。とびいりの方を含め、14名が詩作を発表・朗読しました。テーマは『絵本』、葉祥明展に合わせたものでした。子どもから大人まで、絵本に馴染みのある方は多いのではないでしょうか。絵本を通した温かい思い出を感じることができるような発表となりました。朗読して下さった方の中には、葉祥明さんの作品に感動したことを詩作にされた方もいらっしゃいました。（Y・M）

階段ギャラリー

県下の小中学校の作品を中心に紹介します

熊本友の会幼児生活団作品展示

2012.4.4-5.6

羽仁もと子が提唱した、「よく教育するとは、よく生活させること」をテーマに活動する幼児生活団の、「音楽」「美術」「飼育」「植物」をベースにした、水彩画や飼育する鳥のテラコッタ作品などの力作が並びました。（A・S）

フリースペース

館内入場無料ゾーンでの館蔵品の常設展示

春の展示替え

2012.4.26

フリースペースの春の展示替えを行いました。今回は、開催中の葉祥明展に合わせて、春らしい、瑞々しく、ポップな作品を中心にご紹介しました。展示作品は、黒木重雄さんの絵画2点、石田澄男さんの絵画5点、そして平川なつみさんの絵画2点です。

収蔵後、初めての展示となる作品もありますのでどうぞお楽しみください。（A・A）

月曜ロードショー上映報告

毎週月曜日14時・18時より　無料

上映リスト（4／9 ～ 6／11）

4月9日	「リラの門」	1957年	フランス、イタリア映画　94分
4月16日	「ザッツ・ザ・ウェイ・オブ・ザ・ワールド」	1975年	アメリカ映画　100分
4月23日	「ナビゲーター」	2001年	イギリス、ドイツ、スペイン映画　96分
4月30日	「マンモス」	2009年	スウェーデン、デンマーク、ドイツ映画　121分
5月7日	「五月のミル」	1990年	フランス、イタリア映画　107分
5月14日	「市民ケーン」	1941年	アメリカ映画　119分
5月21日	「接吻」	2006年	日本映画　108分　＊日本語字幕付き
5月28日	「シド アンド ナンシー」	1986年	イギリス映画　109分
6月4日	「ファム・ファタール」	2008年	韓国映画　114分
6月11日	「長州ファイブ」	2006年	日本映画　115分　＊日本語字幕付き

CAMKEESの活動

美術館ボランティア
CAMKEES（キャンキース）による活動紹介

CAMK ピアノコンサートvol.12

2012.4.29

当館のピアノボランティアを一堂に介したコンサートも今回で12回目。男性ピアニスト3名の参加は過去最高でした。それぞれの持ち味を生かした選曲、演奏にいつもとはひと味違ったコンサートになりました。

「昨年（12／23）に続いて2度目ですが、次も来たいと思って来ました。今回は男性の方も多く、それぞれに個性ある選曲もよかったです。曲の前の自己紹介も心に響く話でした」（アンケートより）（E・Z）

【参加人数80人】

CAMK「読みがたり」第32回 テーマ「春がきた」

2012.4.21

開催中だった展覧会に合わせて、葉祥明さんの絵本『ジェイクとふうせん』をはじめ、お誕生月のお友達に拍手をプレゼントした、エプロンシアター『かくれんぼ』を紹介しました。「タン・タン・タンポポ」のリズムに合わせて手をほっぺたにくっつける手遊び歌では、可愛い笑顔がたくさん見られました。（C・T）

【参加人数30人】

CAMK「読みがたり」第33回 テーマ「ことばあそび」

2012.5.19

今回のパネルシアターは、あいうえ王さま、かきくけこうしゃく（公爵）が登場し、最後は「ん」で終わる、言葉のつながりが楽しいお城の物語でした。大人気の手遊び歌『さよならあんころもち』では、お土産用に小さなあんころもちを、囁くような小声で歌って作りました。壊れないようにそ～っとポッケにしまう可愛い子どもたちの姿が見られました。（C・T）

【参加人数35人】

CAMK「読みがたり」第34回 テーマ「雨」

2012.6.16

警報が出るほどの大雨でしたが、たくさんのお友達が読みがたりに来てくれました。

いつも通り、手遊び歌『あたまかたひざポン♪』のメロディーにのって楽しく始まります。

絵本は『ぞうくんのあめふりさんぽ』『からあげくん』そしてリアルな絵のタッチにみんなの目が釘付けとなった『カミナリこぞうがふってきた』を紹介しました。手遊び『科学マジック移動くん』では、一瞬で鉛筆が移動するパフォーマンスにお父さん・お母さんもビックリされていました。最後は、いつもの2倍以上もある特大紙芝居をお届けしました。雨降りの日に、ちょっとだけ特別な読みがたりを楽しんでいただけたようです。（C・T）

【参加人数39人】

ホームギャラリーからのお便り

ホームギャラリーから
おすすめの一冊をご紹介いたします。

VOL.12

「おはなし名画シリーズ ゴッホとゴーギャン」

監修／辻茂　企画・構成／西村和子
文／川滝かおり　博雅堂出版　1992年

今回は、キッズサロンからおすすめの一冊をご紹介します。

「ローランサンとモディリアーニ」、「ルノワールとドガ」などの『おはなし名画シリーズ』。その中でも、誰もが知っている《タンギー爺さんの肖像》が表紙のこちらの本は、ゴッホとゴーギャンの生涯を童話風にアレンジしてあり、色鮮やかで大きな図版は子どもから大人まで読みやすい内容となっています。

《カンヴァス前の自画像》のページでは、「画家になろう！」と決心するゴッホのお話など、名画を楽しみながらその画家の生い立ちや出来事を簡潔に知ることができるのが魅力です。

それぞれの画家の年譜や生まれた国の地図も掲載されており、作家や作品についての興味を深めることができます。

親子で名画を楽しみながら、全シリーズを読破してみるのはいかがでしょうか？（Y・M）

GⅠ
GⅡ

葉祥明阿蘇絵本美術館バスツアー「葉祥明の世界を撮る」

2012.4.22

葉祥明展関連イベントとして、葉祥明阿蘇絵本美術館バスツアーにいってきました。

当日は朝から雨模様で霧がたちこめる中、葉祥明阿蘇絵本美術館に到着。葉山祥鼎館長のお話を伺い、館内を見学しました。美術館は、葉祥明さんの絵本からそのまま出てきたような外観。その中に、葉さんの原画などが並んでいます。

午後になり、葉山館長と草原を散策するころには、霧もいっきに晴れ、気持ちのいい空気と、景色を楽しむことができました。

散策中、葉山館長おすすめのスポットでは、木々が雨露でキラキラと輝き、天然のクリスマスツリーのようで、参加者の方々から歓声があがっていました。

霧の景色や、青空の風景など、様々な表情を見せてくれた阿蘇の景色を、思い思いの構図で写真撮影。葉祥明さんの絵本の世界を体感できたバスツアーでした。（N・H）

【参加人数27人】

折り紙でジェイクを作ろうワークショップ

2012.4.28-5.6

ゴールデンウィーク期間中、キッズサロンの特設コーナーで「折り紙でジェイクを作ろうWS」を開催しました。葉祥明さんの絵本に登場する白犬のジェイクを、3枚の折り紙を使って顔、しっぽ、足の四つのパーツに分けて完成させるものです。

小さいお子さんにはちょっと難しいところもありましたが、大人も一緒に熱中して折っている姿が見受けられました。

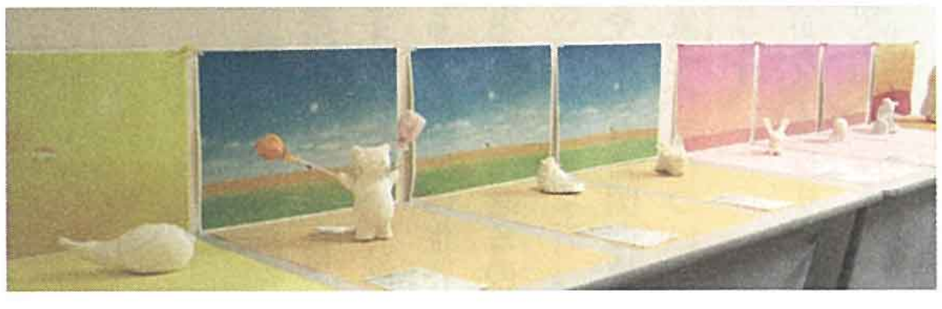
組み合わせてジェイクが完成すると、かわいらしさと達成感でみなさん笑顔になっていました。それぞれ個性のあるかわいいジェイク折り紙が出来上がりました。（N・H）

【参加人数95人】

親子ワークショップ「粘土で動物をつくろう！」

2012.5.3

葉祥明展の関連イベントとして親子ワークショップ「粘土で動物をつくろう！」を行いました。内容は、葉さんの描く作品に合わせて、その中に登場するオリジナルの動物を紙粘土でつくり、物語を考えるというものです。白い紙粘土を耳たぶくらいの柔らかさになるまでコネコネする際、その質感に子どもたちは大喜びでした。動物は、オコジョ、うさぎ、キリンにゾウにサメやサソリにもぐらなど、バリエーション豊かなものが作られました。また、ストーリーも、結婚式を挙げるロマンティックなものから、目頭が少し熱くなるような切ないもの、思わず笑ってしまうものなど、葉さんの作品からインスピレーションを受けた様々な15の物語が完成しました。（C・T）



＊作品は、当館の階段ギャラリーで2012・5／10～5／31まで展示しました。

【参加人数31人】

北鎌倉葉祥明美術館 堀内重見館長講演会

2012.5.26

葉祥明展関連企画として、北鎌倉葉祥明美術館堀内重見館長に葉祥明さんの作品の変遷について語っていただきました。幼少時の家族写真にはじまり、九州学院時代の作品や、絵本作家を目指すきっかけとなった谷内こうたさん、影響を受けた作家のアンドリュー・ワイエスなどの作品を紹介しながらの説明に、メモを取られる方も見受けられました。熊本弁を交えた語り口に時折笑いも起こり、和やかな講演会になりました。（E・Z）

【参加人数60人】

GⅢ

ギャラリーⅢ(GⅢ)は、熊本、九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです

GⅢ vol.84

熊本アーティスト・インデックス Scene 2

2012.4.25-6.24

2010年夏に開催した「熊本アーティスト・インデックス」の第二弾として、熊本出身／在住の若手アーティストによる「熊本アーティスト・インデックス Scene 2」展を開催しました。絵画の池田陽一、田中裕子、野田竜太郎、澤村武山、彫刻の森英顕による28点の作品を展示しました。(Y・H)

アーティスト・トーク

2012.5.4

「熊本アーティスト・インデックス Scene 2」展の出品作家5名が揃い、展示作品の前で、さまざまな制作エピソードをお話しいただきました。

野田竜太郎さんは、今回はドローイングを新しい形で展示し、ドローイングやデッサンと日々の生活が繋がっていて、続けることによって一歩先へ到達できるとお話しいただきました。

池田陽一さんは、油絵具から日本画の画材、金箔の使い方など、自身の制作の可能性を広げた素材について語っていただきました。

田中裕子さんは、クラゲをずっとモチーフにしており、この作品ではクラゲを包み込む水の動き、そのヴォリュームを描こうとしたとお話しされました。

森英顕さんは、クスノキを使った木彫で、人の存在や気配、その時間の経過や痕跡を、形やモチーフ、色で表現を重ねていきたいとお話しいただきました。

澤村武山さんは、セザンヌやフォーヴのアーティストの着眼点、制作スタイルを知ることで、八代の日常の光景に目を向け、描くようになったとお話しされました。(Y・H)

【参加人数50人】

熊本城下まつり inマチンナカ

2012.4.28

城下まつりの開催に関連して、全館無料と同時に、銀座通りを歩行者天国にして行われた「城下まつりinマチンナカ」に、現代美術館のブースを出張開店しました。葉祥明展のグッズや、ホテル日航熊本オリジナル「ジェイクパン」の販売の他、ジェイク折り紙ワークショップや、ミニステージで読みがたりボランティアさんの手遊びやお話し会などを行いました。快晴の青空のもと、たくさんの方々に美術館をPRでき、楽しんでもらえた1日となりました。(A・S)

【参加人数30人】

明後日朝顔 全国大会in天草

2012.5.25-26

日比野克彦氏の「明後日朝顔プロジェクト」に参加する各地域で、持ち回りで実施される全国大会が、天草で行われました。初日の苗植えは、キリシタン館の壁面を5ブロックに分け、それぞれ各参加地域が持ち寄った苗を植えた他、天草市役所にもプランターが設置されました。当館は、昨年度の朝顔の活動内容報告と、開館10周年となる今年の報告を行い、水戸、舞鶴、四万十、福岡、鹿児島、横浜などからの参加地域との親交を深めました。(A・S)

ART DE GYAN

アート・どぎゃん。

＊熊本弁でアートはどうなの？という意味です

養真流 いけばな展

2012.5.11-13

アートスペース大宝堂
熊本市中央区上通町5-6
TEL096-354-2155

身近な草花をさりげなくいけばなに取り入れる流派として定評のある、養真流のいけばな展が開催。今回目を引いたのが、子どもたちの花席。見よう見まねで生けているという話だったが、幼い頃から植物を媒介に大人と接し、表現する喜びを重ねていく環境は理想的なのではないかと思った。ちぎり絵とのコラボレーションの花席もあり、新しいことに挑戦する姿勢が伺える華展だった。（E・Z）

男達の花 草心流 真生流

2012.5.11-13/5.18-20

犬飼記念美術館
上益城郡益城町惣領1530（益城病院内）
TEL096-286-3611

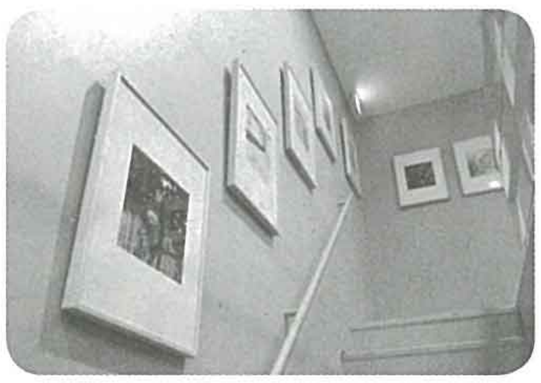
タイトルのとおり、男性による2流派合同のいけばな展が開催。病院に隣接されている空間に、初夏を感じさせる花々が生けられていた。繊細なガラスの器に大胆に生けられている紫陽花や、あまり花材としては見慣れないサニーレタスが生けられていて、おおらかさと大胆さが感じられる空間になっていた。（E・Z）

中川正子写真展「新世界」

2012.6.3-7.2

tetorigarden
熊本市中央区上通町3-20
TEL096-359-3015

雑誌、広告などで活躍する写真家中川正子さんの展覧会。東京、岡山、福岡を経ての巡回展。会場であるtetorigardenは、美容室という珍しい展示場所である。1階から2階まで、美容室の壁に沿って作品がならぶ。作品は、中川さんが出産や東日本大震災を経験し、そこから新たに見えてきた「世界」を写している。子どものかさぶたのあとや水面、花火など何気ない日常の景色がきらきらと輝き出し、少しの変化も見逃すまいとする作家の想いが感じられる展覧会であった。（N・H）



2012 sojo painting 崇城大学芸術学部 美術学科 洋画コース展

2012.6.8-17

崇城大学ギャラリー
熊本市中央区花畑町10-25
TEL096-323-1158

洋画コースの1～4年生、院生、卒業生による作品展。1年生は鉛筆による裸婦や石膏素描、2年生は油彩による静物画で修練、3年で模索、4年で表現というものを少しずつ獲得という年次ごとの姿が浮かび上がっていた。4年生のなかには自分が

MUSEUM INFORMATION

第16回お話し玉手箱 LIVE

2012.4.28

第16回お話し玉手箱LIVEが開催されました。RKKアナウンサーの本田史郎さん、福島絵美さんが、落語絵本「おおおかさばき」（川端誠）、「津波!! 稲むらの火 その後」（高村忠範）、「おなかの赤ちゃんとお話ししようよ」（葉祥明）、「子どものこころを感じてみようよ」（葉祥明）の4作品を朗読されました。

まずは、本田さんと福島さんの掛け合いも軽妙な「おおおかさばき」。息のあったテンポの良いやりとりはさすがの一言でした。

続いて「津波!! 稲むらの火 その後」。本田さんの力強く温かな声によって語られる復興の軌跡。この時代だからこその重みを感じます。

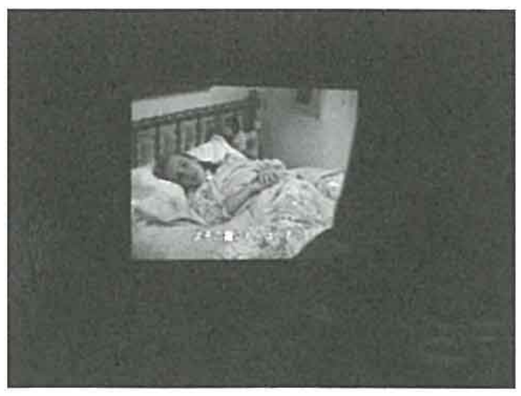
最後に、現在、開催中の「葉祥明展 ―地平線の彼方へ―」にあわせて葉祥明さんの作品を2点。「おなかの赤ちゃんとお話ししようよ」と「子どものこころを感じてみようよ」。美しいBGMにのせた福島さんのやさしい声と語り。じんわりと心に響きます。

会場にいらっしゃったお客様も一心に聞き入っていらっしゃいました。（M・F）

【参加人数90人】

ゴールデンウィーク 特別映画上映会

こども編2012.5.5
おとな編2012.5.6

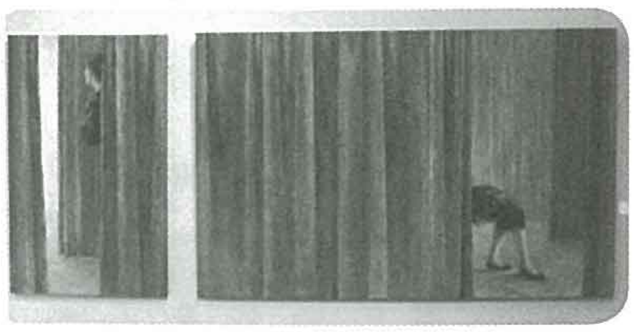


ゴールデンウィークに親子で美術館を楽しんでいただくために、特別上映会を開催しました。5日の（こども編）では、イギリスのTVアニメ「リトルロボット」（2004年／イギリス制作／60分）からスタート。おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に子どもたちが楽しんでくれました。みんなが大好きな映画「トムとジェリー 火星へ行く」（2004年／アメリカ映画／74分）は、始まった途端に笑い声が起こり、人気の高さがうかがえました。最後の上映作品はこちらも人気の「ハリーポッターとアズカバンの囚人」（2004年／アメリカ映画／142分）。2時間を越える作品ですが、最後までゆっくり鑑賞していただきました。映画が終わったあとは、特別協賛のフジバンビさんからドーナツ棒をプレゼントされてご機嫌のこども達でした。

2日目の（おとな編）では、葉祥明さんも大好きという宇宙をテーマにした作品「コンタクト」（1997年／アメリカ映画／150分）を上映しました。（E・Z）

【参加人数こども編130人、おとな編60人】

何をみつめているのかを観客にしっかり伝えることが出来るようになっている作品がいくつかあった。院生の小谷佳恵さんの《I am》の赤いカーテンの表現は上品かつ軽やかな独特の魅力があった。卒業生の上野洋嗣さんの《灯台の見える海岸》は画面構成のセンスが良く、丁寧に描かれた作品だった。（H・T）

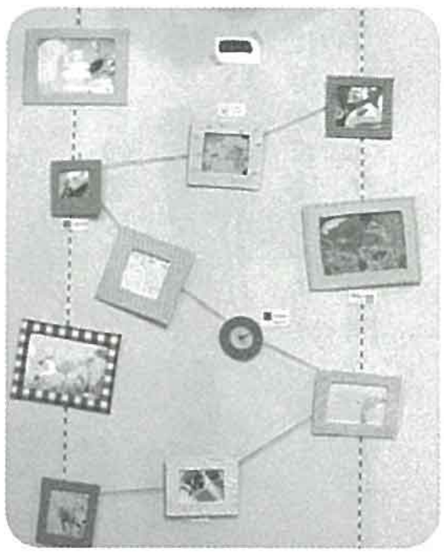


こんとらすと

2012.6.10-17

equipment:FLOOR
熊本市中央区南坪井7-17
TEL 096-323-1197

ネットで知り合ったカメラ好きによる、しみずけんたさん、くについくみさん、そして、しまもとさん、ふくしまさんのユニット、しましまの2人と1組で開催された初の写真展。暮らす場所も仕事も違う平均年齢22歳の若い視線の先がカフェの白壁にならんでいる。シックな額縁に入れられた〝あっかんべー〟を思いっきりしている女の子や、大人サイズのTシャツに縫いつけられた、ねじり鉢巻きの粋なお爺さんの横顔、ナナホシテントウムシが飛び立つ瞬間や揺れる野花の写真をカラフルな布地でぐるっと装飾されたものなど、見る側を楽しませる工夫が施された楽しい展示会であった。（C・T）



市山くじらやうつわ展Vol.2

2012.6.19-24

熊本県伝統工芸館　2階展示室B
熊本市中央区千葉城町3-35
TEL 096-324-4930

天草に工房を持つ陶芸家、市山富美子さんによる工芸展。約500点にも及ぶ作品は、たった一人で製作されたというから驚きだ。今回の展示では、夏に向けて、白色を基調とした涼しげなうつわやマグカップ、3種類の釉薬が組み合わされた独特の色合いを持つ小皿など多数の作品が飾られた。思わず夏のメニューを乗せてみたくなるような、そしてどこかほっこりとする雰囲気を持つうつわが集まった展示会であった。

ちなみに市山くじらやの、くじらと器の合わさった可愛らしいロゴは日比野克彦さんによるデザインだ。（Y・M）

「四季への想い」展後期

2012.6.21-30

画廊喫茶三点鐘
熊本市手取本町3-8　有明ビル3F
TEL 096-326-3040

熊本県在住の女性作家16名による展示会。年齢は30代～80代と幅広い。四季への想いとは、日本の四季の風景に想いをはせるというだけでなく、日々過ごすなかでの感動を表現していると喫茶店店主の小山淡花子さんは語る。向日葵や、肥後椿のほか、静物や人物など、さりげない日常が生き生きと描かれ、梅雨のどんよりした空気にすがすがしさを与えてくれる展示であった。（N・H）

編集後記

5月から10月末までの期間、熊本市現代美術館では朝顔の育成～種の収穫が重要な美術館活動のひとつになります。

これは実は、アーティスト日比野克彦さんの「明後日朝顔プロジェクト」参加によるもので、2007年から継続・参加しています。宇宙飛行士の山崎直子さんとともに宇宙を旅した「宇宙朝顔」も2010年から育成しており、今年で3代目。また、昨年の不作により（虫害にあいました）、全国の明後日朝顔参加校・館・機関に助けを求めたところ、なんと全国14か所から明後日朝顔の種が熊本に届けられました。

美術館エントランスの花壇「いのちの花壇」と、キッズサロン（当館内幼児の読書・あそびコーナー）の大窓のベランダで育てています。

全国各地から、育てた人々の想いにのって、熊本まで旅してきた明後日朝顔の種たち。ぜひご来館の折には、明朝の開花に向かってつぼみをふくらませている朝顔のすがすがしさをこやかな姿を楽しんでくださいね。

編集長　冨澤治子

［執筆者一覧］＊原稿の文末にイニシャル表記
兼城昌山（書道家）（S・K）
森山淡草（書道家）（T・M）
本田代志子（熊本市現代美術館主任学芸員）（Y・H）
藏座江美（熊本市現代美術館主任学芸員）（E・Z）
冨澤治子（熊本市現代美術館主任学芸員）（H・T）
坂本顕子（熊本市現代美術館主任学芸員）（A・S）
芦田彩葵（熊本市現代美術館学芸員）（A・A）
藤本真帆（熊本市現代美術館学芸アシスタント）（M・F）
高橋知江（熊本市現代美術館学芸アシスタント）（C・T）
濱川倫子（熊本市現代美術館学芸アシスタント）（N・H）
丸吉ゆかり（熊本市現代美術館学芸アシスタント）（Y・M）

ART KISS LETTER アート・キッスレター
vol.58盛夏号（2012年7月）【無料】
発行人：桜井武
編　集：冨澤治子
デザイン：石井克昌（MOTOSHIKI）
印　刷：シモダ印刷
発　行：熊本市現代美術館
860-0845
熊本市中央区上通町2-3
電　話 096-278-7500
ファックス 096-359-7892
http://www.camk.or.jp/

【次号は秋号（10月発行予定）】

Visitor's letter

来館者のみなさんからのメッセージ

アンケートに寄せられた感想（抜粋）を紹介します

葉祥明展

・葉祥明氏の一部の作品しか知らなかったので、初期の作品から見れて良かった。（北九州市、男性、40代）

・色の美しさ、統一性に感動です。（熊本市内、女性、50代）

・すごく繊細な鉛筆での作画があったかと思えば油絵の印象など全然違う画風があったりしてビックリした。絵本のさし絵としては、全体に見ていてついほほえんでしまうものばかりで心があったかくなりましたが、考えさせる内容になっていたりして深いなーと思いました。（熊本県内、女性、30代）

WORLD NEWS

ドクメンタ13 dOCUMTENTA(13)

6月に始まったカッセルの「dOCUMTENTA(13)」(2012・6・9・16)。今回のディレクターはキャロライン・クリストフ・バカルギエフで、展覧会はメイン会場であるフリデリチアヌム美術館(図1)、ドクメンタ・ハレのほか、新美術館、中央駅、カールスアウエ公園のほか、市内の古いアパートやホテルなどへと広がり、出品作家は193人が挙げられている。

図1

この国際的な現代美術展であるドクメンタは第二次大戦後の1955年にカッセルの都市の再興にあわせて始まり、当初は4年毎、近年は5年毎に開催されている。今回、明確なテーマは掲げられておらず、その点に価値を置いているといえるだろう。展覧会の開催にむけて作家へ依頼し、プロジェクトの準備から実現までの過程を記録した『The Logbook』や、100人の覚書、思想をまとめた『Book of Books』を順次刊行しており、一つのコンセプトに集約させることのない可能性を示すものであろう。展覧会では、多様な展示場所において作品がそれぞれの場所の歴史に静かに寄りそうかのような作品やプロジェクトが展開されており、これはカッセルという都市やドクメンタの歴史の個性、独自性を知ることであると同時に、世界のどこにでも存在する普遍的なものに目を向ける機会となった。

図2

メイン会場では、ロトンダを「脳」に見立て、多様な時代、文化、社会のなかでの、密やかでありながらも確かな存在を示す品々が集められ、ドクメンタ全体の縮図とされていた。(図2ロトンダ)

アウエ公園では約50作品(図3ジュゼッペ・ペノーネ、図4ソン・ドン、図5大竹伸朗)が設置されており、屋外で気持ちよく過ごしながらアートを楽しむことが出来るようになっていた。木立のなか、ジャネット・カーディフ&ジョージ・ビュレス・ミラーのサウンド・インスタレーション(図6)に耳を傾ける人々が座していた。戦闘機の爆音のような響きや賛美歌のような荘厳な調べによって、私たちの心が揺れ動く様を体感した。

図3

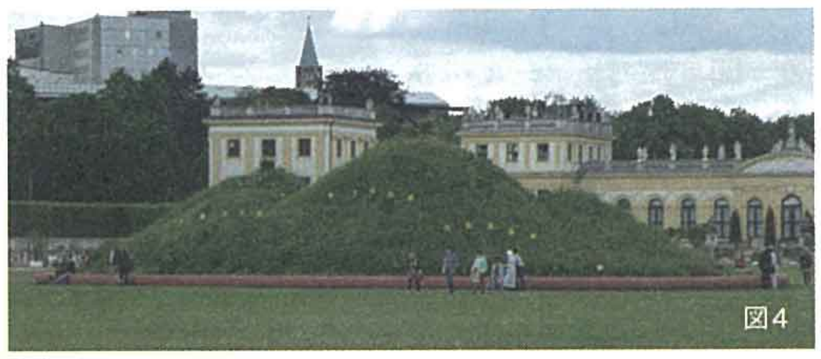


図4

図5

図6

カッセル中央駅のプラットホームでは、スーザン・フィリップスの《Study for String》(2012年、24チャンネルのサウンド・インスタレーション、13分)(図7)が展示されている。テレージエンシュタットに移送されたユダヤ人作曲家パヴェル・ハースによる《Study for Strings Orchestra》(1943年)の楽曲をビオラとバイオリンのパートが重なりあい、分断されながら展開していく。哀愁が漂うその響きからは、かつてカッセルの工場で戦車が製造され、工場とカッセル中央駅、ヴィルヘルムスヘーエ駅が強く結びついていたこと、また1941~42年にカッセル中央駅から3度のユダヤ人の移送が行われたことなど、その場所のかつての記憶を呼び覚ますかのような時間が流れていた。

図7

自然史博物館で展示されていたマーク・ディオンの作品(図8・9)は、同館で所蔵されている「木のライブラリー」のための樫の木で作られた本棚である。18世紀終盤にカール・シルトバッハによって制作された木でつくられた木に関する530冊にも及ぶ本のために、ヨーゼフ・ボイスが1982~87年のドクメンタで行った「7000本の樫の木プロジェクト」とも結びつけられる樫の木を用いたのである。豊かな教養を伝えるアーティファクト、さらにはドクメンタとともに刻まれていくカッセルの歴史が重なり、新鮮な発見となった。

このように今回のドクメンタの出品作品には、過去への小さな手掛かりを探す考古学的な視点をもちながらも、定型の言葉や行為から解き放たれたかたちでの表現がなされていたと言えるだろう。(Y・H)

図8

図9